

交流プログラムの目的

- コーヒーだけに頼らない自立したコミュニティづくりに向けて、フィリピンの農民の経験や知恵を学ぶ。
 - ・「農民とは？」という価値観
 - ・持続可能な農法による有畜複合農業
 - ・山間地における多種目少量生産
 - ・収入多角化に向けた地域に存在する資源の有効活用
 - ・適正技術の活用
- 東ティモールにおけるコーヒー生産・日本への輸出に関する経験や知恵を北部ルソンと共有する。

東ティモール・参加メンバー

- アフォンソ・ドス・サントス(右)
Fitun Caetanoリーダー
- ルシオ・ジョセ・アルビノ(左)
GATAMIRコーディネーター、ATTスタッフ
- ダニエル・ペレイラ(中央)
ATTスタッフ、KSIボードメンバー



交流訪問スケジュール

■ ネグロス島(11月23日～24日)

- ・AID財団テクノパーク見学、適正技術に関するアイデアを得る
- ・KF-RC(カネシゲファーム・ルーラルキャンパス)見学、
研修生と交流、炭焼きの実演見学
- ・エスペランサ農園訪問、農民と交流

■ ルソン島北部(11月26日～12月9日)

- ・北部ルソンの先住民(IP)やコルディレラについて学ぶ
- ・マラビン溪谷の中規模オレンジ農園訪問、オレンジをつかった加工品の実演見学
- ・カヤパのIPコミュニティに滞在、多種目少量栽培(有機野菜&米)について学ぶ
- ・カヤパにてコーヒーに関するセミナー開催
- ・大都市向け商業作物(高原野菜)を栽培する農民を訪問
- ・ボントックのライステラス訪問
- ・CORDEVメンバーの高地米(陸稻)生産者訪問、陸稻栽培について学ぶ



AID財団テクノパークを見学

<http://www.aidfi.org/>



小型水力発電所を熱心に眺める3人。



ラムポンプ(自動揚水器)がアフガニスタンなどでも広まっているという話をAID財団代表のAUKEから聞き、「東ティモールでもぜひ！」と真剣に耳を傾ける2人。



籾殻をつかった調理用ストーブ

東ティモールのコーヒー産地では籾殻の入手は困難だが、コーヒーを脱穀したカスが有効利用できないか？



小型バイオガスプラント

各家庭に設置というのはハードルが高いが、コミュニティで共同管理して、食品加工用の燃料として使える可能性はある。

KF-RC内見学、研修生との交流



バクテリアミネラルウォーター (BMW) の仕組みについて説明を受ける。

東ティモールの歴史や現状についてKF-RC
の研修生やスタッフに発表。その後夜遅くまで、
社会問題について熱い議論が交わされた。
そしてお酒(とバナナ)と歌・・・♪





前夜のKF-RCの活動報告のなかで、炭焼きに興味を示した東ティモールの3人（東ティモールでは炭の利用はあまり一般的でない）。そして、実際に炭焼きの方法を見せてもらうことに決定。自分が外国から来た仲間の「先生」になるという体験は、研修生にとって貴重な学びの機会となったのではないだろうか。



砂糖キビ栽培だけに頼らない収入の多角化を進めてきているエスペランサを訪問。リーダーのリトから、有機堆肥の製造について話を聞いているところ。ほかにもヤギの飼育小屋や野菜の畑を見せてもらった。

北部ルソン・カヤパに滞在



山間に棚田(米と野菜)が広がるヌエバ・
ビスカヤ州カヤパ。



家屋のすぐ脇に手製のビニールハウスを設置し、育苗しているKEAのメンバー。近くの畑で葉物を中心に10種類以上の野菜を有機農法で栽培している。



10年以上前に慣行栽培から有機農法に切り替えた農民からレクチャーを受ける。「農薬を使用することは、自然を破壊すること。自分の孫の世代のために、有機を実践しつづけていくつもり」と熱弁。

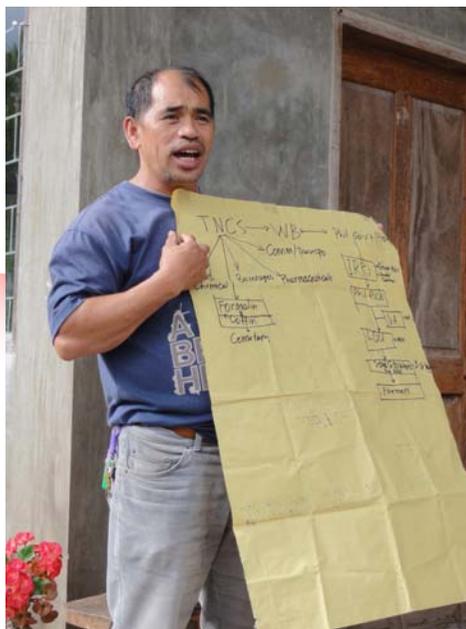


有機のきゅうり畑で収穫体験。マニラ在住の日本人向けに野菜を卸しているバギオの会社に売っているが、多いときには7割以上がはじかれてしまうという。それでも「仲買人にすべて左右される一般市場よりも安定した売り先があることが有難い」とグレッグ。



野菜以外の収入を得て家計を安定させたいと願う女性たちのグループから話を聞く。有機堆肥をつくったり、織物・縫い物をしたり、ピーナッツで加工品をつくったり。「自分のコミュニティに応用できるかなあ」とアフォンソ。女性たちにピーナッツバターづくりを実演してもらった。





KEA設立メンバーの一人であり神父でもあるティトがカヤパの農民に向けて「有機とは何か？なぜ大切か？」というテーマでワークショップをおこなうというので、東ティモールの3人も参加。音楽をうまくつけて、参加者のハートをがっちりつかむ。



40人近く集まった参加者たちと記念撮影
「イダ・ルア・トル！」

テトゥン語とタガログ語やイロカノ語、似ている言葉がたくさんあるけれど、数の数え方も似ていた。





これまでの交流で様々なことを学んできた東ティモールの3人。この日は、カヤパの住民や市役所関係者に対して、コーヒーに関して逆に教える側となった。KEAを中心に今後3年間かけて1万5000本のコーヒーの木を植えていく計画を立てているカヤパの人たち。東ティモールの経験に熱心に耳を傾け、質疑応答も含めて3時間近いセミナーとなった。

マラビン溪谷の柑橘農家訪問



7種類の柑橘を育てているギルバート。柑橘栽培のノウハウ以上に、目標に向けて小さなことから実践し積み上げていくことの大切さを教わった3人。「地域の皆が真似したくなるようなモデルになれ！」

ギルバートのお連れ合いのレジナは、リジェクト品のオレンジをジャムやワインに加工している。その方法を実演してもらった。自分のコミュニティでも試したい、とルシオ。



コルディレラの棚田群を見学



2000年以上受け継がれているという棚田の中を歩く。



女性たちがグループになって、畦の整備をしていた。すべて手作業の根気のいる仕事によって、古くから受け継がれてきた棚田が守られている。



「でも、自分たちの地域にはこんなに豊かな水はない。
乾季には大地はカラカラに乾いてしまう。雨季には
すべてが流されてしまう」

「土だってこんなに肥沃じゃない。かたい土しかない」

「だから、ここと同じようにはできないよ」

by アフォンソ&ルシオ



「ないものねだりではなくて、あるもの探しをすべき」と
グレッグ。「手をかければ、必ず結果が出る！」とも。



元々とてもやせた土地が、農民の知恵と
たゆまぬ仕事によって、立派な畑になった
場所に連れて行ってくれた。

陸稲(赤・黒米)の生産地を訪問



赤米・黒米を生産しているキリノ州の農家。かんがい設備はなく、雨水で栽培している。



粃をもらった。「水稻は無理だけれど、この陸稲なら育つかもしれない。帰って試してみる」とアフオンソ。

グレッグによるワークショップ



「君たちはコーヒーを育てて売っているかもしれないけれど、『農民』とは呼べないんじゃないかと思う。土から収穫(収奪)するだけでなく、土に養分を返していけばまた豊富な恵みを得ることができる」と堆肥について説明するグレッグ。



コーヒーシーズン後のコミュニティ内での食料の不足が大きな問題であり、コーヒーだけに頼らない作物の多様化について学びたいと思って、フィリピンに来た。色々な場所をまわるなかで見てきた作物のなかには、自分たちの場所でも栽培することができるものがあるとわかった。一気にそのすべてに取りかかることはできないが、まずは少なくともその半分は試してみようと思決意している。



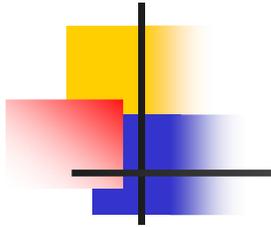
コミュニティに戻ったら、学んだこと全てをメンバーに説明して、できることからチャレンジしていきたい。特に印象的だったのは、カヤパの人たちが実践している野菜と米の多種目栽培。自家消費と市場での販売用のバランスをとることの重要性を学んだ。自分のコミュニティもカヤパのように美しいコミュニティにしたい。元々の地形的にはカヤパに似ているので、きっとできるはず！それから、養豚について非常に興味深く学んだ。とくに、豚のエサについてきちんと栄養素を考えて与えている人はほとんどいないので、今回学んだことをコミュニティで近い将来実現していきたい。

ギルバートより:

今回のみんなが滞在中に学んだことは成功に向けた3割程度にすぎず、残りの7割はこれからどうやって実質的なサポートを得ながら実践していくかにかかっている。It's in you!!



(2009年にネグロスの農民が北部ルソンに来て交流したときのことを話して)彼ら・彼女らは、「政治的権利」という点についてとてもよく訓練されたリーダーたちだったと思うし、農業に関してだって自分たちより多くの知識を持っていたと思う。足りなかったのは、行動に移すということ。それをAPLAによる交流プログラムというチャンスがあって、北部ルソンで学びを得て、KF-RCをスタートさせることにつながったのだと理解している。それが交流の成果だった。だから、今度は3人の番だ。それぞれがコミュニティに帰って、コミュニティの中でベストを尽くせば必ず何か変化が起こる。サポートしてくれる仲間(APLAのネットワーク)もいるわけだし!



この交流プログラムは、公益財団法人トヨタ財団より
2010年度アジア隣人プログラム助成金を受けて実施しています。